

ニュースを読み解く

京滋の視点

相次ぐイスラム過激派による事件

中東の過激派「イスラム国」による日本人質事件は社会を震撼させた。先月にはフランス・パリで12人が死亡する週刊紙銃撃事件が起き、ナイジェリアではイスラム国を支持する武装集団「ボコ・ハラム」が勢力を拡大している。イスラム世界をめぐる背景には何があるのか。宗教倫理の専門家と、イスラム教徒でもあるマリ出身の研究者に聞いた。



こはら・かつひろ 大阪府生まれ。同志社大大学院神学研究科修了。博士（神学）。同大一神教学際研究センター長。専門は宗教倫理。著書に「宗教のポリティクス」「原理主義から世界の動きが見える」（共著）など。

世俗と宗教、価値の対立

産物だ。米国はイラク戦争を仕掛けフセインを排除したが、復興プランがなく、共存していたシーア派やスンニ派、クルド人が対立した結果、後にイスラム国の中心になる軍事要員を生んだ。イスラム国だけでなくテロリストの多くは米国の軍事介入の結果生まれた。イスラム過激派の残虐行為や奴隷制復活、性暴力などは許されぬ行動だ。だが

同志社大教授 小原 克博さん

イスラム国の日本人質事件では、2人を拘束していたイスラム国がタイムシンクを探り、安倍首相の中東訪問に合わせて公表した。首相がああ時期にイスラエルで米国寄りと思われる発言をしたのは問題だった。首相は「人道的支援」を強調するが、現政権の「積極的平和主義」は有志国連合

の軍事的同盟とほぼセットになっている。中東で日本が得ていた高い評価を崩しかねない。欧米は植民地化や軍事介入の形で中東に介入し続けてきた。だが日本は中東にニュートラルな立場だ。この中立性を放棄してはならない。中東と負の関係がなく、奇跡的な復興を果たした戦後の豊かさは

中東世界で近代化の手本になっている。政府開発援助（ODA）や国際協力機構（JICA）など困窮者を援助する良いモデルを中東に提供している。「積極的平和主義」ではない人道支援の道を探るべきだ。憎悪が憎悪を生む悪循環は空爆で断ち切れない。イスラム国はイラク戦争の副

彼らが何に憤っているのか立ち止まって考える必要がある。学校襲撃を繰り返すボコ・ハラムには神を前提にしない西洋型教育が良くないとする考えがある。ボコ・ハラムによる殺害や拉致が悪だと言っただけの簡単だ。だが彼らは西洋的なシステムや価値観を無理強いされた歴史に憤っている。

中東で高評価、中立放棄は危険

欧米社会は脱キリスト教的になり宗教的情感を忘れかけている。テロの根底にあるのは西洋型の世俗的価値と宗教的価値の対立だ。根本から解決を図るには価値観の対立に繊細な目を向け、和解に至る文化を醸成する不断の営みこそ必要なのだ。

この点が現れたのがフランスの週刊紙銃撃事件だ。事件後にパリ市民が表現の自由を訴えて行進した、あの熱狂的な姿はテロを沈静化できるのか。預言者ムハンマドを親と同じか、親以上に大切にしているイスラム教徒にはムハンマドが公然と批判されるのは耐え難い。欧州の教徒は少数派で大半は移民だ。強者が「自由」を叫び続ける限りその熱狂の裏で我慢を強いられる弱者が存在し続ける。「自由に耐えられないのなら欧州から出ていけ」と言うようなもの。こんな構図は絶対に幸せな社会ではない。

（聞き手・吉永周平）